# 山岳科学総合研究所 友の会会報

2013年9月　第11号

もうすぐはじまる涸沢カールの彩り

## もくじ


第10回鳥海山現地研修会　報告１　熊谷　久 …… 2
報告２　小林 久雄 …… 5
上高地キッズ・キャンプ2013　報告　小林 久雄 …… 6
会員リレーコラム …… 7
・立花裕美子　「鳥海山　山行」
上高地クエスチョン …… 8
おしらせ …… 8
編集後記 …… 8

**第10回鳥海山現地研修会　報告1**
**東北の貴婦人を愛でる旅に参加して**
**序章**

“鳥海山”は、秋田県と山形県の県境に跨がり、出羽山地と日本海の東西約26km、南北約14kmにその裾野を広げる標高2,236mの秀麗な独立峰で、日本有数の規模を誇る成層火山であり、「東北の貴婦人」と讃えられる東北地方で一番標高の高い山である。また、古くから大物忌神(オオモノイミノカミ)として崇拝されてきた信仰の山でもある。

この報告書は、「東北の貴婦人」に魅せられて、鳥海火山山頂の新山にアタックを試みた、男と女達のドラマである。♫ 風の中のスーバル・・・♪ プロジェクトX!!

**第一章(初日)**

8月26日(月)は、さわやかな秋風と、普段の行いが良い方ばかりではないはずですが、すばらしい初秋の好天に恵まれました。

朝日観光の大型バスは、鳥海山登山と象潟(キサカタ)・庄内平野の自然と文化を尋ねる、山口会長を初めとした友の会の男女26名を乗せて、予定よりやや遅れた8:45頃松本IC(インターチェンジ)に入り、一路、東北を目指しました。

車中では、山口会長の挨拶からいきなり“乾杯”へ・・・。事務局から、山口会長が自然公園関係功労者として環境大臣表彰を受賞されたことが紹介されまして、参加者全員から祝福の拍手が沸き起こりました。

バスの中では、参加者がそれぞれ自己紹介をして親交を深めていくなかで、姨捨サービスエリアでは、バスの後席がいきなりサロンに大変身!!!。更なる親交を深めるための環境が整いました。

私たちを乗せた観光バス(以下、バス)は、長野自動車道から北陸自動車道に入り、新潟中央JCT(ジャンクション)から日本海東北自動車道を順調に走り、昼食の新潟県村上市の岩船港鮮魚センターには12:45頃到着しました。ここでは、各自が好みの昼食を摂りましたが、岩牡蠣や刺身定食で新鮮な海の幸を堪能された方もいらっしゃいました。この頃、斥候の市川副会長は、単騎(馬ではなくタクシーだそうですが) 、私たちのために今夜の宿舎や明日の登山口である鉾立(ホコタテ)のリスクアセスメント(危険源の調査と評価)に駆けずり回っていてくれたようです。

バスは、15:00少し前に山形県鶴岡市に入り、道の駅「あつみ(温海)」で休憩した後、再び、あつみ温泉ICから日本海東北自動車道に入りました。長いトンネルを抜けて庄内平野に入ると、遠くに山頂を雲に隠した鳥海山が見え始め、誰からともなく歓声が上がりました。私も、初めて見る「東北の貴婦人」の雄大な山容に感動を覚えました。車中では、現地研修会にふさわしく、秋田県にかほ市のご出身である信州大学山岳科学総合研究所特別研究員の佐々木博士が、鳥海山の噴火活動の歴史や、流れ山と呼ばれる小丘の成り立ちなどを詳しく説明してくださいました。

バスは、鳥海山を右手に見ながら国道7号を秋田県に入り、本日の宿舎である「にかほ市温泉保養センター金浦はまなす荘」には、17時頃の到着となりました。

**第二章(大宴会初日の巻)**

友の会恒例の「絵にも描けない大宴会」は、18時から山口会長の環境大臣表彰受賞祝賀会と併せて、市川副会長の乾杯の音頭により盛大に始まりました。夕飯のメインディッシュは「秋田由利牛の鉄鍋焼き」で、生ビールや地酒とともに山海の珍味を堪能させていただきました。どなたかがおっしゃっていましたが、「友の会がどういう会であるか？ただの大酒飲みの会だ」と。徳利がどんどん追加されてカラになっていく様は、正に言い得て妙だ

と密かに感心いたしておりました。(私も、その一員ですが・・)

それでも、大酒を飲んで大騒ぎをしても理性を失わない友の会会員は、明日の鳥海山登山や象潟・庄内平野見学に万全な体調で臨むべく、20時には友の会運営委員の竹原女史による締めで大宴会をお開きとしました。私は、10人ほどの皆様と一緒に20時半頃迄、跡片付けと称して徳利の中身の片付けに協力しておりましたが、21時前には布団に入り意識を失いました。

**第三章(鳥海山登山)**

研修会２日目の 27 日(火)も天候には恵まれました。朝の内は鳥海山山頂に雲がかかっていまして、私は「ガスの中の登頂になるかもしれない」と残念な思いで眺めていました。鳥海山登山を選んだ23名は、象潟・庄内平野巡りコースを選んだ3名の方を残して「はまなす荘」を早朝 6:00 に出発しまして、国道７号から鳥海ブルーライン(秋田県道 131 号)に入り、つづら折りの山道をひた走るバスの中から日本海の絶景を楽しむこと約40分、鉾立登山口に到着しました。

鉾立登山口では、それぞれが登山の装備を確かめて、まずは記念写真。(最初の写真です)鳥海山へのアタックは、6:50 に出発しました。まずは、自然石の階段が整備された登山道を10分ほど歩き､展望台に集合して佐々木特別研究員から鳥海山の講義を受けました。長年、崩壊地の砂防工事に従事していました私は、展望台の正面に見えるＶ字形に崩れ落ちた奈曽渓谷の美しさに感動し、その険しさに元砂防屋の血が騒ぐのを禁じ得ませんでした。

展望台からは、良く整備された石畳の登山道を歩き、雪渓が見られる賽の河原付近(8:00)は、チングルマやニッコウキスゲなどがまだ多く咲いていて百花繚乱のお花畑。私は、友の会の皆さんに高山植物の名前を教えていただきながら、可憐な花をデジカメに納めていきました。

すでに閉鎖していましたが、御浜小屋には8:25到着。眼下に鳥海湖(鳥の海)と笙ヶ岳、溶岩ドームの鍋森の絶景が飛び込んできました。ここでは全員が揃うのを待ちながら､佐々木特別研究員の講義を受けて、鳥海山に対する知識と愛着を益々深めていきました。

休憩中に雲が切れて全容を現した新山を見て「えー、あそこまで行くの!!」とため息をつかれた方達は、安全優先で七五三掛(シメカケ)からの外輪山コースを選ばれました。全員集合の写真撮影や登山コースの確認などを済ませた後の御浜小屋の出発は9:10で、登山ガイドより20分ほど遅れていました。

御浜小屋から七五三掛は、石畳が整備されていてまるで高原の遊歩道でしたが、七五三掛の少し手前から岩塊が見られる普通の登山道となり、外輪山コースへの分岐を過ぎると千蛇谷(センジャダニ)への急な下り坂となりました。千蛇谷の雪渓を横切る時、滑らないよう足元に気をつけながらも「ここでビールを冷やせたら・・・」と不謹慎なことを考えていました。

千蛇谷の右手方向に見える外輪山北斜面(標2,100m程)の大雪渓に目を奪われながら50分ほど登り、頂上御室の大物忌神社(オオモノイミジンジャ)には10:50頃、到着することができました。私は、ここで趣味で集めている鳥海山登山の記念バッジを買い、20分ほど外輪山の写真撮影をしながら休憩を取った後、新山へのアタックに挑みました。

新山は、ここまでの登山コースとは打って変わった亀裂の多い切り立った溶岩の岩山で、その異様な景色に圧倒されながらも15分程で山頂(2,236m)に到着しました(11:25)。

斥候隊の鈴木教授と奥原さんは、30 分以上前に到着していたとのことで、脚力の差に唯々、驚くばかりです。

山頂では、佐々木特別研究員の母上様に心を込めて握っていただいたというオニギリを昼食にいただきました。中身は塩鮭と梅干しの何の変哲もない塩むすびでしたが、今まで味わった記憶のないおいしいお米の味と塩鮭の絶妙なハーモニーに大変感激いたしました。この場をお借りしましてお礼を申し上げます。御馳走様でした。

また、山頂からは、雲の間から僅かに庄内平野と日本海を見ることができましたが、お江戸の方角から時々吹きよせるさわやかな風に乗って「チキショー、俺だけ蚊帳の外か。あー、俺も鳥海山に登りてぇー!!」と市川副会長の声が聞こえたような気がしたのは、大物忌大神のなせる業だったのでしょうか。

予定行程より 1 時間程遅れた正午過ぎ、全員が湯の台口を目指して下山を始めました。外輪山への急坂を登れば、そこからは行者岳と伏拝岳(フシミダケ)までの比較的緩やかな尾根道でした。このルートは右手に新山と千蛇谷、左手に庄内平野と日本海の絶景を楽しめました。伏拝岳の分岐から薊坂(アザミザカ)入口までは難所と聞いていましたが、30 分弱で薊坂を下ることができました。

薊坂入口に大きな雪渓があり、雪渓に慣れた方は、それこそ滑るように下って行かれましたが、私は、転ばないように恐る恐る雪渓を横切ることがやっとでした。薊坂入口から河原宿小屋までの 50 分は、比較的緩やかな下り坂でニッコウキスゲやチョウカイアザミが咲き乱れるお花畑と、雪渓から流れ出すせせらぎを楽しめました。私は、大雪渓と高山植物などを何枚もカメラに納めながら下りましたが、斥候隊の待つ河原宿小屋には 14:00 頃、到着することができました。

私は、河原宿小屋から滝の小屋までの八丁坂で、眼下に広がる庄内平野と日本海の絶景に何度も立ち止まってしまいました。八丁坂の分岐には、湯の台口方面と示されていなかったので、一瞬迷いましたが、バスが待っている方向に行けば大丈夫かなと考えて歩いていましたら、滝ノ小屋が見えてホッとしたことを今でも反省しています。(迷ったら地図を見ましょう)

私が湯の台口に到着したのは、予定より 1 時間遅れの 15:00 でした。倉元研究員が手渡してくれた缶ビールのおいしかったこと。遅れても頑張って歩いている皆さんに申し訳ないと思いつつも「ウマーイ!!!」。

パーティの後方では、足を痛めた方のバッグを担いだり、肩を貸したりする仲間の助け合いもありまして、全員が無事に下山することができました。山岳遭難防止対策協会救助隊長を会長とする友の会らしいすばらしい研修登山だったと報告いたします。

全員が乗車したバスは、一路、山形県鶴岡市湯野浜温泉へ南下して、18 時少し前には 2 日目の宿である「温泉民宿しらはま屋」へ到着いたしました。私も皆さんと一緒に掛け流しの温泉に入り、登山の疲れを十分に癒やすことができました。

**第四章(大宴会 2 日目の巻)**

鳥海山登山と象潟・庄内平野見学を無事終えた 26 名は、今回の参加者で最年長の小林さんの乾杯で大宴会を始めました。メイン料理は、写真左下の岩牡蠣と左上の松葉蟹、大皿に乗ったサザエなどの刺身でした。私にとって何よりのご馳走は、鈴木教授が手配されました山形の地酒です。10 種類程の銘柄が用意されて、大いに堪能させていただきました。

宴会の途中から、参加者の皆様が一言ずつ今回の研修会の感想を述べられました。多くの皆様から、今回の研修会を企画していただいた役員への感謝と、また機会があれば是非参加したいという建設的な意見をいただくことができました。

私は、皆さんの感想をこの報告書にまとめるために、しっかりと覚えていたつもりでしたが、山形のおいしい地酒が私の記憶装置を完璧にフォーマットしてくれたようです。ゴメンナサイ。

**第五章（帰路）**

湯野浜温泉を８時に出発した私たちは、庄内空港に寄り道をして山形のお土産を買い求めました。帰路は､庄内空港 IC から日本海東北自動車道を南下する往路と同じコースでしたが､新潟県村上市勝木から国道 345 号へ入り､海岸線の絶景「笹川流れ」などを車窓から見学したあと、日本海東北自動車道に戻り北陸自動車道の燕三条 IC から寺泊港を目指しました。

昼食は、長岡市寺泊港近くの寺泊中央水産の２階食堂で、生ビール（地ビール）と新鮮な海鮮丼をご馳走になり、楽しい研修会を締めくくることができました。

**第六章（まとめ）**

第 10 回友の会研修会は、平日に３連休してという企画でしたから、私は、大いに悩みましたが、この機会を逃したら生あるうちに鳥海山に登ることないだろうと思い、お盆休み返上で仕事を片付け、参加させていただきました。このすばらしい研修会を企画し運営された友の会役員の皆様、信州大学の鈴木教授と佐々木、倉元両特別研究員、朝日観光バスの運転手、そして今回参加された全員の皆様に心からお礼を申し上げて、報告書をまとめさせていただきます。

東北の貴婦人に魅せられた　熊谷　久

**第 10 回鳥海山現地研修会　報告２**

**東北の貴婦人「鳥海山」を学ぶ（反省文）**

友の会　スタートして早くも二年を過ぎた。

現地研修会も記念の 10 回に…….

年間の行事も度重ねて、随分研修も登山もその内容も充実して来た。

友の会の会員の親睦などは恒例の宴会でいつもように……

しかし、今後自立した計画を続けるためには　立ち止まっての「反省」が必要かと。

① 会員の要望を幅広く取り入れての計画立案に必要な事は何か?

・研修会内容について

山岳地形や地質、植生

動植物（水生生物）の生態

建物や歴史と文化と地域の暮らし

・信州をみて、県外にも…….展開を広げる

これらの基本を再度確認してみる事で、独自に「友の会」として発展できる。

初めての県外の現地研修会を終えて、今後の計画に向けて思う事を取り入れる。

思えば　今回は初めての二泊三日コースでしかも本格登山でもあった。過去の実績は主にバスツアーで一泊コース、しかも県内。登山の安全性確保の観点も会員の個人の経験や実力に任せた部分も多く、初日に登山のコース説明や注意点の周知、行動の班分けとリーダーの明確化も必要だった｡天候判断やタイム状況判断なども事前に打ち合わせ（ミーティ

ング)をすべきだった。
　次回以降の計画では、会員内で研修会のチーム作りも視野に準備期間も合わせて、計画したい。　昨年と今年に「大鹿・下栗の里」を訪ねた旅や「木曾・王滝村」を訪ねた旅も一部の会員に事前準備などしていただき、無事に出来た事から今後の進め方を「友の会」として少し方法や準備を含めて確立して、末長い「研修会」と親睦を深めていきたい。
　特に、登山を取り入れる事での準備では、事前準備(下見)やコース決定などのノウハウを充実すべきなので今回の反省を反映したものとすることが必要だと思う。
　会員の年齢が少し高齢化している事から、若手の会員の参加に向けての対策が兼ねてより課題となっていたが、益々その必要性を感じる。経験豊富な会員も多い事から、個々の力量を発揮いただける「研修会」を計画する必要があると思います。
　親睦を十分深めて、美味しいモノも年齢に合わせ、またお酒の量なども年齢に合わせて、楽しめる工夫としたい。

小林 久雄

**上高地キッズ・キャンプ 2013　報告**

「2013 上高地キッズ・キャンプ」～上高地の自然の中で思いっきり遊ぼう～は、松本市、安曇野市の小学生 14 名の参加で実施されました。
　少し心配な天候の中をバスは沢渡のナショナルパークゲートに着いた。雨の出迎えの中、新しいゲートの説明を聞いて再びバスの車中。細萱ガイドのトウモロコシの振る舞いと軽快なお話しの中でバスは上高地に入った。激しくなった雨の中バスは帝国ホテルに…、玄関先で大瀬支配人の出迎えを受けてスタートしました。

　ここから穂高橋と梓橋を渡って、上高地浄化センターを見学。平成４年から上高地の汚水処理を続けているセンターの様子を勉強し、ウエストン碑を経て東屋へ。

　西穂山荘から早朝下山した粟沢支配人（気象予報士）から雨のメカニズムのお話しを聞いた。河童橋を渡って、清水川の冷たさにふれ、風穴の涼しさも体感しながら上高地の草木のお話を聞きながら明神の信大上高地ステーションまで歩いた。
　雨も小降りになりＢＢＱとカレーの準備をしてから梓川に自然観察。
　ＢＢＱとカレーの夕食後には、ナイトハイクを楽しみ一日目は無事に終わった。
　翌朝は朝の散歩の後で朝食。
　施設の掃除やあと片づけなど全員で奮闘。

　松田ガイドの思い出作り教室では、各自オリジナルの木製の名札づくりにチャレンジした。
　思いの外見事な出来栄えにみんな笑顔。
　雨模様の空を気にしながら上高地を歩く。
　ビジターセンターで上高地のお勉強をしていたら、雨も上がって河童橋から穂高の山々も顔をだした。
　インフォメーションセンターにてお弁当をいただき帰りのバスに乗り込み、アッという間の二日間。
　自然を満喫して「２０１３上高地キッズ・キャンプ」は終わりました。

小林 久雄

## リレーコラム

**鳥海山　山行**

第１日目と３日目は熊谷さんが詳しく書いてくださっていると思うので、私は２日目の鳥海山の山行について少し触れてみたいと思います。

前日の酒も何のその、山に寄せる思いで予想より早く目が覚めた。お天気も大きな崩れはなさそうだ。鳥海山、鳥海山と心の中で唱えながら、バスに乗り込む。バスはつづら折りの坂道で徐々に標高を稼ぎ、日本海を見下ろす象潟の登山口へ到着した。朝日がまぶしい!!

歩き始めから賽ノ河原・御浜小屋までは素晴らしい石畳の登山道だった。鳥海湖の見える御浜小屋で小休止、本当はもう少し汗をかいて、昨夜の酒を出してしまいたかったが、それでも心地よい道のりだった。その後は雪渓やはしごも何か所かあり、変化に富んだコースで心は躍り足は弾んだ。少しおなかが空いたなァと思った頃、大物忌神社へ到着。生ビールと佐々木先生のお母さん手作りのおにぎり、ソーセージでおなかを満たした。

いよいよ山頂へ向かう。新山はその名のとおり新しい山なので、噴火後の男性的な岩がそそり立っている。急な岩場を一歩一歩進む。楽しくてしかたない。少し登りつめたところで大きな岩と岩の間の細いところを下る道が見えた。「すごーい！」岩が崩れたらと思うと怖いが、そのスリルと急な下りの岩場にワクワクした。無事に岩の間を潜り抜け、神社から２０分ほどで頂上へ。槍ヶ岳より狭いくらいの山頂で２０人以上がひしめきあって記念写真を撮った。

休憩もそこそこで、早い人は下山へ向かった。すでに１２時を過ぎていたのでバスの迎え予定時刻を考えると、少し急がねばならなかった。外輪山を巡る道はまた快適で、トレイルラン向きのコースだなと思った。外輪山から下って行くと、雪渓や雪解けのせせらぎのそばを通り、別ルートの参加者と合流後、河原宿の小屋に着いた。時計は１時３０分だった。

あと３０分で駐車場まで下りるのは無理かと話していたら、この道を登って下る登山者が「今朝、登りで１時間３７分だった」と教えてくれた。「よし１時間で」と思い少し速足で下ったがバスに辿りついたのは２時４０分頃だった。下山を祝っての冷たいビールをいただき、大満足の山行を無事終えることができた。

九州生まれの私にとって、東北は未踏の地。まして東北の貴婦人・鳥海山は手の届かない存在でした。友の会の皆さんのおかげで、アプローチに関して何の心配も苦労もなく「連れてって」いただき心から感謝感謝の山行でした。

また来年の企画を期待しています。ありがとうございました。

立花裕美子

シロバナトウウチソウ

チョウカイフスマ

チョウカイアザミ

（写真：竹原文子）

## ？上高地クエスチョン？

ウィリアム・ガウランド（ゴーランド）

日本アルプスの名づけ親であることは、山に登られる方の多くが周知のことだと思います。

W・ガウランドは 1872 年に、現大阪造幣局の化学兼冶金技師として招聘され、重要なポストを歴任する傍ら、古墳の調査や登山、ボートの漕法指導などに当たった。彼の古墳研究は高く評価され、「日本考古学の父」と言われている。

1881 年日本学者チェンバレンが著した「日本についてのハンドブック」で初めて japnese alps として紹介されるが、この中で 1877 年外国人として初めて槍が岳に登り、信州の山岳地帯の記述を担当したのがガウランドであった。したがって日本アルプスの命名者はガウランドということになる。

後日来日した W・ウエストンが日本アルプスの名称を世界中に広めた。

後に日本山岳会初代会長小島烏水は、飛騨山脈を北アルプス、赤石山脈を南アルプス、木曽山脈を中央アルプスとした。

## お・し・ら・せ

当初の事業計画にはありませんが、11 回目を迎える現地研修会を計画しました。詳細は別紙のとおりですが、今回の主旨は「上高地への感謝」です。ゴミを拾い、穂高岳山荘の小屋番であり映像作家の宮田さんの話も楽しみです。

そして、上高地の活動で何かと利用させていただいています、上高地ステーション前庭に木製テーブルをみなさんで設置していただき、たき火を囲んで暮れゆく上高地の晩秋を楽しみましょう。

多くの会員のご参加をお待ちしています。

**編集後記**

猛暑といわれた夏もいつの間にか過ぎ、中秋へと移ってまいりました。７月以降上高地の外来植物をテーマとした ９ 回目の現地研修会、キッズ・キャンプそして 10 回目の現地研修会鳥海山には 27 名の会員が参加していただきました。

10 回目の研修会の行程や内容は、リポーターをお願いした熊谷氏の報告のとおりですが、小林運営委員長の反省文にもあるように、事務局としても登山を軽く考えていたのではないかと反省をしています。今後の研修会に生かしてまいります。

大震災の年の夏休み、福島県飯舘村の子供たちを招いて、松本市と共に上高地において子供キャンプを友の会初事業として実施しました。

以来２年半が経ちますが、福島を含めた被災地の状況はあまり良くなっていないようです。７年後の東京オリンピック楽しみではありますが、津波や原発事故を目の当たりにした子供たちが、そして全国津々浦々で育っている子供たちが、それぞれの地域、環境の中で誇りをもって暮らし、世界の祭典を迎えることができる均衡ある地域づくりが求められています。

それにしても熊谷さん、膨大な報告書ありがとうございました。

（友の会会報編集委員会）

山岳科学総合研究所友の会会報　第 11 号
発行日：2013 年 9 月 19 日
発行：山岳科学総合研究所友の会
〒390-8621　長野県松本市旭 3-1-1
信州大学山岳科学総合研究所友の会事務局
TEL：0263-37-2432　FAX：0263-37-2438
E-mail：ims-support@shinshu-u.ac.jp